

食いたい 寝たい 帰りたい

千葉県 庄司 音松

突然の非常召集で起こされた。ここは、北満州の孫呉。朝食などおいて暇はない。連隊本部の裏に集合。そのとき初めてソ連参戦を聞かされた。そのまま五号無線機を背負い、中隊付の通信分隊として、二方山に向け出発した。一方の通信分隊は連隊本部付となり、お互いに無事を折りつつ、荒神山に向かって行った。途中、雨が降り始めた。その日は昭和二十年八月九日であった。

二方山は、陣地構築中で、山肌が見え、上空から山はよい標的になる格好の場所のような気がした。二、三日は平穩無事で、散兵壕に、タコつぼ掘りの毎日であったが、ついに戦闘機の目標となり、機銃掃射され始めた。そのうちに、敵が私たちのこの二方山に向け、攻撃を加えてきたが、だれ一人怪我もなく、そのタコ

つほの中で身を寄せ、弾の直接攻撃をかわすことができた。夕刻近くであった。敵の迫撃砲の攻撃が始まった。こちらからも野砲を撃ち始めた。迎え撃つ安達隊一個中隊、その後方百メートルくらいに小倉中隊、その通信分隊が私たちであった。中隊長に、状況を連隊本部に電報を打つよう命令され、通信開始したが、相手方は全然応信がなかった。この戦闘で、味方も敵も戦死者が出た。もちろん怪我人も出たが、野戦病院がどこにあるか、だれも知らない。その場で息を引き取っていった。なおも私は連隊本部に打電を続けたが、杳として応答はなかった。後で聞いた話であるが、連隊長自ら戦闘を放棄し、どこかに姿をくらましていたそうで、皆バラバラに行動し、鉄道線路つたいに逃げた者が多かったとの話である。相手がいないのであるから、交信不能は当然であった。

その夕刻であったか、退去命令が出て、次の山、忠節山に向け息を殺して真つ暗の中を行進した。一緒に行動をともした分隊であったが、真のやみではついに私と鈴木国武と二人で、あとの人たちははぐれてし

まった。私と鈴木は暗いうちに忠節山に到着したが、分隊長はほのぼのと明け方近くに到着した。朝、飛行機が飛んできて、ピラをまかれた。その内容は、「一時間以内に下山せよ。下山せなくば一斉射撃する」。私たちが分隊は、武装解除して、通信機をたたき壊し、雑のうと水筒だけで下山した。下山して驚いた。ソ連の戦車の砲が一斉に山に向けられていた。そこで、私たちは騎兵隊の隊舎に入れられ、ほっとした気持ちと同時に、人種の異なつたソ連兵を見て、複雑な気持ちと不安でいっぱいであつた。

そのうちに、いよいよ日本に向け帰るんだとばかり、甘い言葉に乗せられ出発した。千人であつた。しかし、北へ北へと向かつて行軍を続ける。ますます不安がつくる。ついに、黒竜江の沿岸口に着いた。翌日、船で黒竜江を渡され、ソ連領内に入つてしまった。万事休すである。

食糧は満州から持ってきた糧秣で間に合わせてきたけれども、病人が出てきた。歩行困難な者は、ひき馬に乗せ、「何とか日本に帰る日まで」と、皆ともに励

まし合いながら行軍を続けた。日中は、雨が降らなかつたことが幸いであつたが、暑かつた。だれの顔もほこりで真つ黒である。どこに連れていかれるか、皆目見当がつかない。ソ連の兵隊がマンドリン銃を持って、前後左右警備しながら歩く。九月二十日ごろであつたか、ライチハに到着した。そこから約半日くらい行軍が続き、山の上に出た。そこから見た盆地に收容所が見えた。その建物は穴を掘り、上にテントが張られ、見るからに寒そうな建物が四棟見えた。千人であるから、一建物に二百五十人かと想像しながら歩いたら、そのとおり、その收容所に入れられた。その收容所の周りは、木の切り倒した切り株がいつぱいで、整理されていなかつた。

到着した夕刻であつたか、「十日間のうちに越冬準備をしろ」との命令があつて、毎日その木株の整理作業等を実施したけれども、そのときからだれの口からも、足が重いとの声がしきりと出た。しかしながら、このシベリアで冬を越さなければならぬと思うと、だれもが「がっかり」として、肩を落としていた。ま

た、行軍途中、病気になり、何とか日本に帰るまでとは、歯を食いしばり、希望を持って生きてきた人たちが、数日の間に、ばたばたとこの世を去った。私たちも、いつ帰れるか全くわからずに、ただ不安な抑留となった。

収容所周辺の根株をとり、越冬準備の作業も気抜けた作業であったが、とにかく住めるようにしなければ、自分たちが困る。何とかその作業が終わったのは、その年の十月始めであったと思う。そのころから、夜、目が見えなくなる人が続出してきた。日本の平田軍医いわく、野菜物を食べないからだ。なお、葉も何にもない。手のほどこしようなないと、悲観的な言葉しか聞けなかった。

この収容所の下は炭鉱であり、私たちをこの炭鉱で働かせるための収容所であった。そのほか、主な作業はギルダールの町に集まる石炭の貨車積み作業。この作業は三交代で使われた。また、この町に入ってくる貨車に坑木が入ってくる。しかし、この坑木は有蓋車に積載されて、非常におろすには骨が折れた。これら

の作業をするためには、山を一つ越え、その頂上でほっと一息入れ、小便をするのが通常となった。だから、この山をだれ言うとなく、小便峠と名づけた。

食糧は主に、コウリヤン、麦、アワ、ニシンの塩漬、米が少々、コウリヤンのふすま、ジャガイモ、塩、食用油で、そのほか黒パン三百五十グラムで、スープといっても、馬鈴薯少しに、塩味で食用油を浮かせただけで、満腹感を味わうにもほど遠かった。コウリヤンのふすまの食糧のときは、この食糧ではのどに通らなかつた。ついに栄養失調が続出し、だれの顔を見ても精気がなく、また口をきくにも腹がすくというようになり、夕方、それでも「勝ってくるぞ」と小声で口ずさんでいたと思うと、翌日は冷たくなって死んでいた。死を悟っての別れの歌かに聞こえた。その栄養失調の人たちは、いつの間にかどこかに移され、交代に比較的元気な人たちが連れて来られ、この殺人炭鉱で働かされた。

また、あるときは、乾燥数の子が主食として配給されたこともあったが、これは水に浸してふやして、み

んなに配給されたこともあったが、重労働の食糧には余りにもひどかった。お互いに口にする言葉は食い物の話。大福餅、田舎ぼたもちと、寝ても夢で食い物が出てきた。そのほか、お帰りの話と、ただただ限られた話ばかりであった。私は豆腐と油揚げのみそ汁を食べたら、本当に死んでもいいとさえ思った。お帰りの話はだれ言うことなく、何月の何日に帰れるといううわさが広がってきたが、その日が来ても、空しくその日は過ぎていった。

ある日、ニシンのたる詰が主食として配給された。そのふたを開けたとたん、腐った臭いがツーンと鼻をついた。このものは到底食糧にはならない。すぐにソ連の軍医大尉に連絡。実情も見てもらい、交替をもらうように交渉した。軍医は了解し、そのものを処分するように言つて帰つた。さて、その処分方法であるが、穴を掘つて埋めれば、必ず掘り返して食つてしまう。種々とみんなと考へた末、便所に捨てたらどうかという案が出た。それならばだれも食わないだろうと、皆一決し、早速実行することにした。その便所とは、一

メートルくらいの幅、長さ十メートルくらいで、深さも一メートルくらいの穴を掘り、そこに板を渡し、何人でも一緒に用をたし、その後ろには大きな穴を掘り、そこに流れ出るようつくられている。この便所には、価値を失つた十円札が落とし紙に使われたこともあった。また、あるときには、妻が配給になり、その妻が全然消化せず、便所が表だらけになったときもあった。そのときは栄養失調が続出した。夏のことでもあり、たまりにはウジがわき、深さは膝の上まであった。そこに炊事係が、たまりの中ほどを目掛け、投げ始めた。そのニシンは沈まないものと、沈んだものとあった。そのとき、周りで見ていた私たちの仲間が、いきなりそのたまりにザブザブと入つていくではないか。そして、付いているそのウジを払つて食べようとするではないか。炊事係が「食うな」「食うと死ぬぞ」と、皆叫んだが、その声には耳を貸さなかったが、口には入れなかつた。このままでは伝染病になり、皆死んでしまう。これは大変とばかり、ソ連兵を呼び、マンドリン銃で威嚇し、ようやくのことで皆を静めた。これ

が生地獄でなくて何であろう。また、ここまで追いつた空腹の苦しみは、だれもが想像できないでありましょう。

こんなむごい話は私としてははしたくはございません。しかし、話をするときには、涙なくしては語れません。

昭和二十二年、三回目の冬を越し、三月の声を聞いた。いよいよ帰れそうな気配を感じた。警察官、憲兵であった人、また反動分子と評された人たちが、どこに連れて行かれたか、収容所から姿を消した。いよいよ私たちの移動が始まった。全員が装具を背負い、収容所を後に行軍が始まった。そして、いつも作業に行くときの山を越し始め、だれもがそこで最後の小便をし、頂上から二年間住んだ収容所を眺め、何か複雑な気持ちで、私はサヨナラを収容所に向かって叫んだ。ほかの人たちも、皆ともに叫んで、小便峠を越え、ギルダールの町に到着した。そこには貨車が待っていた。私たちが坑木の貨車おろし作業をしたところだ。だれの顔を見ても明るく、帰れるという希望でいっぱいだ

あった。その日は昭和二十二年三月二十五日ごろではなかったかと思う。

貨車が動き始めた。これで日本に帰れると心では思ってみたけれども、うそをつかれつかれ、この地に連れて来られ、強制労働をさせられたと思うと、手放しで喜ぶことはできなかった。列車は走り始めて幾日目であったか、日本人が雪かきをして、手を振ってくれる姿を何回となく見送った。だんだんと皆無口になった。不安な気持ちである。山にさしかかり、機関車二台で引き始めた。山を下り、平坦な線路を走り始めたとき、私が突然「海が近いぞ」と叫んだ。皆、何か救われた気持ちで「本当か」と、扉に近づき、外の景色を見た。「俺は海の近くで育った者だ。その山の岩石は、私の故郷の海の岩石によく似ている。大丈夫だ、港が近いぞ」と、私は本当にそう思った。皆もその言葉を信じてか、いくらか元氣を取り戻したように思えた。それから二日後ぐらいにナホトカの港に着いた。それは、昭和二十二年の四月初旬ではなかったか。海辺は凍っていた。

その翌日、帰還のための収容所に入れると思いきや、そこから四、五キロ歩いたところの収容所に入れられた。そこには四千人くらいの日本人が収容されていた。また、だまされたかと思つたが、ナホトカの港が見えただけで、何か気が軽かつた。翌日から、毎日ナホトカの築港作業をさせられた。このナホトカには、日本人が山を削り、石を運び、さまざまな作業に従事させられた。しかし、この作業は楽しみでもあつた。ソ連の誘導艦が朝見えないと、お昼近くにその艦を先頭に日本の引揚船が日の丸を立てて入港してくる。そんなときほど、日の丸をありがたく思つたことはない。病院船の高砂丸、明優丸、第一大拓丸と、何か日本の空気に触れたような気がしてよかつた。しかし、幾そこの船を見送つたことであつたらうか。ある日のことであつた。帰還の船が入港して、間もなく日本人が乗船を始めた。そして、夕刻近く出帆し始めた。そのとき、若い私の仲間が、いきなり「帰してくれ」と叫び、両膝をつき、男泣きに泣き崩れた。引揚船は、無情のように小さくなつていった。私は「生きていれば必ず帰

れるよ」と、涙をこらえて彼に言つたが、しかしそれも自分に対して言つた慰めの言葉のようでもあつた。私たちにもいよいよ帰れる日が来た。第一、第二、第三収容所を経て、いよいよ乗船である。その日は忘れようとしても忘れられない。昭和二十二年六月十五日、船は第一大拓丸であつた。そして、六月十八日、舞鶴着、六月二十三日、夢に見た故郷の駅に降り立つた。

私の青春の一ページとは何であつたか。それは、食いたい、寝たい、帰りたい、ではなかつたでしょうか。

シベリア抑留で見た生地獄

和歌山県 松浦 虎市

昭和十六年、召集令状を受け取つた。人生での青春を忠君愛国に命をかけて戦いを続けた。その終点はシベリア送りとなつたのです。

皆様のおかげで生還したが、シベリア抑留者の頭の